

氏名	有持 旭
ヨミガナ	アリモチ アキラ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博映第17号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 独立以前のエストニア・アニメーションに関する民族誌的解釈：プリー ート・パルンの〈不条理〉を視座にして 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	山村 浩二
(論文第1副査)			()	
(作品第1副査)			()	
(副査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	桐山 孝司
(副査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	布山 タルト
(副査)	早稲田大学	教授	(文学学術院)	鈴木 雅雄
(副査)	多摩美術大学	教授	(美術学部)	港 千尋
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

今日、アートというカテゴリーが20世紀以前から受け継がれ変化してきた美術を指すならば、アニメーションは果たしてアートなのか、それとも異なる文脈で語られるべきものなのか。この思考は本論においても大切なことである。

エストニアは、28年前に歌を歌うことでソ連から独立して以降、IT産業や不動産で急成長している。この特異な歴史と文化形成を持つ国で制作されたアニメーションは、度々「不条理」や「シュルレアリスム」という言葉によって論じられてきた。他方、ソビエト社会に対しユーモアで対抗していた多くの風刺画家たちが、現在ではアニメーション作家になっている。一国にこうした潮流があるのは世界のアニメーション史からみて特異である。

本論では、これらを背景として、アニメーション作家プリート・パルンの作品に感じる「不条理」とは何か、という問いから始まり、それを読み解く過程において、ソビエト時代に様々な分野を横断してきたパルンという作家を分析した論考である。その目的は、シュルレアリスムおよび風刺画の受容を通して、パルン作品における不条理とユーモアの関係を明らかにし、独立以前のソビエト・エストニアにおけるパルンに対して民族誌的な解釈を行うことである。歴史研究を経て作家研究や理論研究に繋げることにより大切な概念が見えてくるであろう。パルン分析は、それが過去の事象であれ現代への眼差しであれ、まるで筆者自身が未知なる場所と自分の家を行き来する奇妙な旅のようである。

問いをその旅の出発点として、まず、印刷媒体に掲載された絵や記事、作家が所有していた活動写真などの収集を行った。そして、それらを補足するような形でオーラル・ヒストリーを行った。それらは具体的な研究が進んでいないエストニア・アニメーションにおいては一次資料の価値があろう。

本論はこれらを歴史調査および比較検討のための資料としその立場から論じており、終着点に向かう過程で、ソ連時代のエストニアにおける「不条理」な日常や「ウドゥタミネ」と呼ばれるユーモアが、民族誌的

アニメーションへと連動していく様態をみていく。

(総合審査結果の要旨)

ブリート・パルンの短編アニメーション作品「ホテルE」の分析を中心に、1991年ソ連から独立する前後のエストニアで制作されたアニメーションとアートの歴史、そしてパルンが歩んできた風刺画家としての軌跡とその周辺の風刺画の状況と歴史、エストニア美術界におけるシュルレアリスム受容の遍歴を、詳細な調査とインタビューによって描き、エストニアの社会背景とパルン作品の構造の分析や画像比較によって、その不条理性を論じた。エストニア・アニメーションと、パルンの持っている不可解さとユーモアを、エストニア語の「ウドウタミネ」というキーワードを軸に論考した点がこの論考の中心である。

15時間に及ぶブリート・パルン本人への彼の母国語エストニア語によるインタビューと、その周辺の風刺画家、アニメーション監督、編集者ら多くの関係者にインタビューを敢行し、また資料の風刺画の掲載された書籍や雑誌の収集など、現地調査に基づいて調べた価値のある仕事で、特に一次資料の貴重さは、すべての審査員から高い評価を得た。

論者の関心として「シュルレアリスム」と「アニメーション」との関係があり、そこが論考のモチベーションになっていたが、エストニアのファイン・アート界の中心にいない風刺画家たちによる「シュルレアリズムグループ」の活動と、シュルレアリスムと形容される事多いパルン作品と、芸術運動としての「シュルレアリスム」との関係が、論旨としては、まだうまく帰着していない。また、タイトルにもある「民族誌」的という言葉の定義付がなされておらず、研究対象と方法論としてのフルドワークが同じタームでまとめているのが誤解を招くのではとの意見もあった。

また三部構成の各章で、問いと答えが一致していないように見受けられ、論旨を明快にしきれておらず、章の関連付が弱い、各章の結論付が後付け的などの指摘もあり、論理的展開の部分では弱さも見受けられた。

しかしパルンの難解な作品「ホテルE」の興味から、作者のブリート・パルンそして、その周辺のソビエト時代のエストニア・アニメーションと風刺画への広がりによって、アニメーションと風刺画との画像比較と、エストニアの文化的資質の紹介によって、世界的にもまだ論考が少ないエストニア・アニメーションとパルン作品の理解を促したことは、この論文の大きな成果だろう。

また、本論の中心ではないが、「シュルレアリスム」を切り口に、19世紀フランスのアニメーションのパイオニアで、支離滅裂派（アンコエラン）と呼ばれるパリのアーティスト集団に属し、プレシュルレアリスムとも評されているエミール・コールと、チェコのシュルレアリスム活動を現役で続けているヤン・シュヴァンクマイエルと、その後継者で実験的なオブジェクトアニメーションを制作しているイギリスのアメリカ人クエイ兄弟へと繋がる大きなアニメーション史を、平面と立体というアニメーションのテクニックの視点から俯瞰している点も興味深い。